

「森の聞き書き」手法を活かした地域環境教育プログラムの創出：
インドネシア・中スラウェシでの実践

一般社団法人あいあいネット・副代表理事 島上宗子

1. 事業の目的・概要

本事業は、りそなアジア・オセアニア財団 2012 年度環境事業の助成を受けて実施した『森の聞き書き』手法を活かした地域環境教育プログラムの創出』の成果を元に、インドネシアの中スラウェシ州において地域の実情に即した環境教育プログラムを作り出すことを目的とした。

2012 年度の助成では、ボゴールの科尔ニタ高校で実施された「聞き書き」研修に、中スラウェシの高校教員と NGO 関係者 6 名が参加・視察し、中スラウェシの実情に即したアクション・プランを作成し（2012 年 9 月）、そのプランに基づき、実践を試みることをめざした。結果として、研修を視察した教員らが中心となり、2012 年 12 月に中スラウェシの高校 4 校に通う計 16 名の高校生を対象に「聞き書き研修」を実施した。

2012 年度の成果をもとに、2013 年度は、①中スラウェシで実施した「聞き書き研修」に参加した高校生による聞き書き作品と研修のプロセスをまとめた小冊子の作成、②中スラウェシのパル市とドンガラ県の高校・教育行政関係者を招いての成果発表セミナーの開催、③「聞き書き」を経験したボゴール・科尔ニタ高校と中スラウェシの高校生との聞き書き交流を実施した。これらの取り組みにより、「聞き書き」という手法が中スラウェシの環境教育プログラムの中で活用され、他地域との交流に刺激を受けつつ、地域の実情に即した形で展開される可能性を探った。

2. 事業の実施概要

上述のように、今年度の主な事業は、①インドネシアでの「聞き書き」冊子の刊行、②中スラウェシでの聞き書きセミナーの開催、③ボゴール・科尔ニタ高校での聞き書き研修のサポートと高校生同士の経験交流、である。それぞれの実施概要は以下のとおりである。

2-1. インドネシアでの「聞き書き」冊子の刊行（2013 年 11 月）

前年度の 2012 年 12 月 22～24 日にパルで実施した聞き書き研修のプロセスと成果をインドネシア語でまとめた小冊子”Kikigaki: Mendengar dan Menulis----Menjembatani Budaya antar Generasi”（聞き書き----世代を越えて文化をつなぐ）を発行した。この小冊子はインドネシアの Insist Press より 500 部刊行したほか、デジタルでの出版を行っている Wayang Force を通じてデジタル図書としてインターネットを通じて誰でも無料で入

手できる形をとった (<https://www.wayang.co.id/index.php/toko/detail/23931>)。

この冊子には、研修に参加したパルの高校生の聞き書き作品のほか、研修で使用した教材や研修のプロセスを書き込むことで、今後、聞き書き研修の教材として活用できるよう工夫した。

『聞き書き——世代を越えて文化をつなぐ』

INSIST Press, 2013 年, 44 ページ

目次

はしがき：年配者に学ぶ

はじめに：聞き書き——世代を越えて文化をつなぐ

聞き書きのプロセスと作品

中スラウェシでの聞き書き研修 2012

聞き書きのポイント

インタビューのヒント

聞き書き作品：「ラロヴェ（竹笛）名人」

聞き書き作品：「籠づくりがもたらす豊かさ」

参加生徒の感想

吉野奈保子さんインタビュー

おわりに：しっかり耳を傾ける

資料：参加生徒、実行委員会名簿



2-2. 中スラウェシでの聞き書きセミナーの開催（2013年11月17日）

『聞き書き：世代を越えて文化をつなぐ』の刊行にあわせて、中スラウェシで聞き書きセミナーを開催した。聞き書きセミナーは、①日本での「聞き書き甲子園」の取り組みと実績を中スラウェシの高校生および教育関係者に紹介すること、①中スラウェシでの聞き書き研修の成果を発信し、「聞き書き」への関心を高めること、②ボゴールと中スラウェシで聞き書き研修に参加した生徒の交流と学びあいを促すことを主な目的とした。

聞き書きセミナーは、中スラウェシ州教育文化局の協力により、州教育文化局の大講堂にて開催した。セミナーには、日本で「聞き書き甲子園」を推進している NPO 共存の森ネットワーク事務局長の吉野奈保子さんと協力者の岩井友子さん、あいあいネットの島上宗子が参加したほか、ボゴールのコルニタ高校で聞き書き研修に参加した 2 名の高校生、コルニタ高校教師 1 名、ボゴールの NGO スタッフ 1 名が参加した。中スラウェシ州からは、パル市・ドンガラ県・シギ県から計 16 校から計約 70 名の生徒・教員、また、州教育文化局、県・市教育文化局関係者、地元 NGO 関係者計 20 名あまりが参加した。セミナーの主な流れは次のとおりである。

中スラウェシ聞き書きセミナーの主な流れ（2013年11月17日，日曜日）

時間	内容	担当
09.30	受付	
9.50-10.00	開会挨拶	島上宗子（あいあいネット）
10.00-10.10	中スラウェシ州教育文化局局長挨拶	H. Abubakar Almahdali（州教育文化局長）
10.10-10.30	コーヒーブレイク	
10.30-11.30	日本での聞き書き甲子園の経験と成果	吉野奈保子（共存の森ネットワーク）
11.30-11.50	ボゴールでの聞き書きの経験	コルニタ高校生徒
11.50-12.10	中スラウェシでの聞き書きの経験	中スラウェシ高校生徒
12.10-13.10	昼食	
13.10-13.30	ブダティ（地方芸能復興グループ）演奏	ブダティ
13.30-15.20	パネルディスカッション	関係教師，生徒，他
15.20-15.30	まとめ	モデレーター
15.30-15.40	閉会の挨拶	Ewin Laudjeng（セミナー実行委員会代表）



中スラウェシ州教育文化局局長の挨拶



日本の聞き書き甲子園の成果と経験を紹介する



聞き書きの成果を発表する中スラウェシの高校生



聞き書きを経験したボゴールと中スラウェシの高校生の交流

2-3. コルニタ高校での聞き書き研修のサポートと高校生同士の経験交流（2014年1月10～12日）

2012年にNPO 共存の森ネットワークのサポートで聞き書き研修を実施したボゴールのコルニタ高校では、高校の予算を使い、自校の生徒を対象にした聞き書き研修を独自に実施する計画をたてていた。この聞き書き研修の実施を側面サポートすることで、ボゴール県・市政府や西ジャワ州政府から協力を得る可能性や、周辺他校にも聞き書きを拡げていく可能性を探った。

具体的には、コルニタ高校が実施する聞き書き研修の一部を周辺他校にも公開するセミナーの形で実施することで、聞き書きの経験と成果の普及をはかった。日本からNPO 共存の森ネットワークの吉野奈保子さん、あいあいネットの島上が訪インドネシアし、日本の聞き書きの経験を伝えたほか、中スラウェシで聞き書き研修に参加した2名の高校生と2名の教師が参加し、その経験と成果を伝えた。

コルニタ高校での公開セミナー(10日)には、コルニタ高校の生徒約50名と教師10名が参加した他、周辺他校から生徒・教師計約50名、ボゴール農科大学の教員と学生、地元NGO関係者ら、あわせて約150名が参加した。翌11日と12日にはコルニタ高校の生徒20名に限定する形で聞き書きの作品づくりの研修を実施した。セミナーと研修の主な流れは次のとおりである。

ボゴール・聞き書き研修の主な流れ

	日時	内容	担当
1月10日 (金)	8:40	開会の挨拶	Tri Heru Widarto(コルニタ高校校長)
	8:50-9:50	日本の聞き書きの経験と成果	吉野奈保子(共存の森)
	9:50-10:00	コメント	Suryo Adiwibowo(ボゴール農科大学教員)
	10:00-10:30	休憩	
	10:30-12:00	聞き書きの手法	吉野奈保子
	12:00-13:30	昼食・金曜日の礼拝	
	13:30-14:30	名人インタビュー	グループワーク
1月11日 (土)	8:00-12:00	インタビュー内容を書き起こす	グループワーク
		聞き書き作品の構成を考える	グループワーク
	12:00-13:00	文章を整える	グループワーク
	13:00-16:00	昼食	
1月12日 (日)	13:00-16:00	作品を仕上げる	グループワーク
	8:30-9:30	作品講評	島上宗子・コルニタ高校教師
	9:30-10:30	作品修正計画の発表	グループワーク
	10:30-10:45	コメント	Suryo Adiwibowo
	10:45-11:00	コメント	吉野奈保子
	11:00-11:10	閉会の挨拶	Tri Heru Widarto



ボゴールでの聞き書きセミナー



名人・協力者とともに



ボゴール農科大学ボウォ先生のコメント



聞き書きの手法を説明するコルニタ高校教師

3. 事業の成果と今後の展望

計画申請（2012年8月）の段階では、2012年度は中スラウェシでの聞き書き実施に向けたアクション・プランづくりまでを想定していたが、中スラウェシの高校教師とNGOの積極的な取り組みにより、2012年12月には、中スラウェシでの聞き書き研修実施にまで至ることができた。そのため、今年度(2013年度)は、計画申請の段階では想定していなかった幾つかの取り組みを進めた。すなわち、昨年の聞き書き研修の成果を小冊子にまとめ刊行すること、成果発表という形でセミナーを



名人インタビュー



聞き書き作品をまとめる。中スラウェシで聞き書きを経験した高校生がコルニタの高校生をサポート

開催し、地元政府だけではなく、ボゴールと中スラウェシの高校生の交流を促すことである。

中スラウェシでは特に、州の教育文化局が「聞き書き」の趣旨に理解を示し、セミナー開催の会場の無償提供など、具体的な協力を得ることができた。州教育文化局からは、独自の予算で日本での「聞き書き」と高校視察をしたいとの提案があり、その方向で準備を進めていたが、2013年3月に教育文化局局長の交替があり、計画を再検討している。

ボゴールのコルニタ高校では、高校の予算で聞き書き研修が実施されはじめた。高校の枠を越えた拡がりを作り出すため、セミナーを開催し、中スラウェシの高校を含む他校との連携・交流、ボゴール農科大学との高校・大学連携、地元政府やNGOとの連携をめざした。なかでも、ボゴール農科大学教員ボウォ(Suryo Adiwibowo)氏が聞き書きの趣旨と意義を深く理解し、積極的な関与と協力を示したことは重要な成果の一つである。ボウォ氏は、ボゴール農科大学人類生態学学部コミュニティ開発・コミュニケーション学科の教員であり、長く大学の環境研究所の所長もつとめ、政府機関、NGO、大学などと広いネットワークを持つ。インドネシアの聞き書きの展開と深化において、大きな役割が期待できる。

以上を踏まえ、次年度以降の取り組みとして以下を展望している。

- ① ボゴールと中スラウェシですでに実施した聞き書き研修の参加者を対象に「聞き書きコンテスト」を実施する。
- ② 「聞き書きコンテスト」では、高校生が仕上げた「聞き書き作品」をボゴールと中スラウェシの高校教師、政府関係者、学識経験者などからなる審査委員会が審査し、優秀作品を選定する。
- ③ 優秀作品は日本語に翻訳するとともに、優秀作品を仕上げた高校生数名を日本で毎年3月に開催されている「聞き書きフォーラム」に招聘し、聞き書きを軸にした日・イの高校生の交流と学びあいを促す。
- ④ 「聞き書きコンテスト」の実施にあたっては、ボゴール農科大学のボウォ氏や大学生に聞き書き名人の選定や、コンテスト実施運営において協力を依頼し、高校・大学連携をはかる。
- ⑤ 日本側でも、島上が関係している大学や周辺高校との間で聞き書きをめぐる高校・大学連携の可能性を探り、聞き書きを軸にした日・イの高校・大学連携と交流の仕組みづくりをめざす。

これらの取り組みを通じて、地域の実情に根ざしつつ、地域や国境を越えて刺激を受けあい、学びあう仕組みづくりを進めたい。